

国立国語研究所学術情報リポジトリ

相互行為における聞き手反応としての「うん／はい」の使い分け：「丁寧さ」とは異なる観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): recipient response tokens, un/hai, interaction, self-initiated repair 作成者: 山本, 真理, YAMAMOTO, Mari メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000819

相互行為における聞き手反応としての「うん／はい」の使い分け

——「丁寧さ」とは異なる観点から——

山本真理

早稲田大学／国立国語研究所 共同研究員 [-2014.03]

要旨

本研究は「うん」「はい」に代表される「聞き手の短い反応」を対象とし、その使い分けを明らかにするものである。これまでの日本語学・日本語教育における研究では、「うん」と「はい」の違いは基本的には「丁寧さ」のみが異なるものとして提示されてきた。しかしながら、筆者が「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」のインタビュー場面のデータを対象とし、分析を行ったところ、「丁寧さ」とは異なる基準で両者が使い分けられている可能性が示唆された。本稿では、会話分析 (Conversation Analysis) の立場から、インタビュイー (説明者) が自己開始修復を用いて「聞き手」に向けて特別に説明を差し挟み、修復の操作が完了する」とわかる位置において、聞き手はそれまでの反応とは差異化した形で反応をすることを例証する*。

キーワード：聞き手反応、うん／はい、相互行為、自己開始修復

1. 問題意識

本研究はインタビュー場面における聞き手の「うん」「はい」¹といった短い反応の使用について会話分析 (Conversation Analysis) (Schegloff 2007) の立場から検討するものである。聞き手の短い反応については、日本語学・日本語教育の分野におけるいわゆる「あいづち研究²」の中で多くの蓄積がなされている。ただし、厳密に何をあいづちとして認定するかについては研究者によって様々である (大浜 2006)。また「話し手／聞き手」の区別についてもそれぞれの立場によって議論がなされている (大浜 2006: 144)。本稿では「話し手」と「聞き手」の役割が比較的明確に分けられるインタビュー会話を扱い、インタビュアーの質問後になされるインタビュイーの説明とそれに対する反応「うん」「はい」を扱う。その際、説明を開始するインタビュイーを「説

* 本稿は社会言語学会第34回大会にて筆者が発表した内容および発表論文集の研究成果 (山本・柳町 2014) をもとに加筆修正したものである。また、本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト (領域指定型) 「日本語を母語あるいは第二言語とする者による相互行為に関する総合的研究」 (プロジェクトリーダー: 柳町智治, 2014年3月まで参画) および、科学研究費補助金平成27年度若手研究 (B) 「実際のデータに基づいたあいづちの「使い分け」に関する会話分析研究」 (研究代表者: 山本真理 課題番号 15K21447) の研究成果の一部である。

本稿の執筆にあたって、柳町智治氏 (北星学園大学) を始めとしたプロジェクトメンバーの方々、そして横森大輔氏 (九州大学) より有益なコメントをいただいた。また、本データの一部は関西会話分析研究会 (2014年3月開催) におけるデータセッションで提供させていただき、参加者の方々から多くのコメントをいただいた。感謝申し上げます。

¹ ここでの「うん」は「ん」「んー」などを含めた音声的バリエーションの形式を代表するものとして、「はい」は「はいー」「はいー」といった形式を代表するものとする。

² 本稿では「あいづち」と平仮名で表記する。ただし、引用部分については元の表記をそのまま記す。

明者」と呼び、説明を受け取るインタビュアーを「説明の受け取り手」という意味において「聞き手」と呼ぶ。

従来の研究において、あいづちの定義は様々あるものの、それらの多くに共通して指摘されているのは聞き手が用いる表現の種類やその指導の重要性である（水谷 1984, 岡崎 1987, 畠 1988, 橋内 1988, 松田 1988, 水谷 1991）。また、そうした研究においては、主に日本語の聞き手の反応の種類と頻度の多さも指摘されている（水谷 1983, 1984, 堀口 1987, 大浜 2006）。実際に、それらの成果は学習者向けに文法項目を記述した辞書（Maynard 1990, グループ・ジャマシイ 1998）や教科書・参考書（Mizutani and Mizutani 1977, 富阪 2005, 岩田・初鹿野 2012, 武田ほか 2014）でも取り上げられている。

そのうち、本研究が注目するのは、「うん」「はい」が多くの日本語学習者向けの教材で「話を聞いている人が使う短い言葉」（武田ほか 2014: 208 振り仮名は削除）として提示され、両者の使い分けについて次のように述べられている点である。

「うん」は、家族間や友人同士など、ごく親しい間柄でくだけた場面や目下の者に向かって言う場合にしか使えない。改まった場面では「はい」や「ええ」が用いられる。（グループ・ジャマシイ 1998: 489）

これと同様の指摘が Maynard(1990), 富阪(2005)などにも見られる。Maynard(1990: 115)では「「はい」は他の「ええ」「うん」などの中で最も中立的な表現 (*Hai is most neutral*)」と述べられている。また、富阪(2005)や武田ほか(2014)では、聞き手の反応のリストが提示される際に「フォーマルに話したいとき (Formal speech)」の欄に「はい」を配置し、「カジュアルに話したいとき (Casual speech)」の欄に「うん」を配置して提示している。ここからわかるのは、日本語教育において「うん」「はい」は基本的には丁寧さが異なるものとして提示され、形式間の違いに関係なく「「聞いていることを示す」「分かったということを示す」（堀口 1991: 33）機能を持つものとして同列に並べられているという点である。

しかしながら、実際のデータを観察すると、同じ参与者同士の会話において両者が混在することや、参与者らが互いに敬体で話していても「うん」が使用されることがある。以下はその一例である（以下、分析に使用するデータは「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」のものである。4節で詳述する）。

断片(1) [CSJ:D04M0052 問題]

- 01 B: .hまああの:h(0.2)この:う:ん(0.2)
 02 ま ここでやってるような<分析自体>は:
 03 A: はい
 04 B: あの:(0.4)まあ(0.9)一人hええ(0.8)まあデータをとりたい.(.)
 05 こういうu:対面のプースん中で:
 06 A: ↑う↓ん[:

- 07 B: [ええ:人間と機械(.)i:(0.2)の,対話をとりたい_(0.9)で,(.)
 08 A: うん。
 09 B: [そん中に:その:色んなね?(0.2)その問題が-(0.2)
 10→ 問題っていうのはしゅー機械が処理する上での,
 11⇒ A: はい
 12→ B: え:難しい問題っていうのが色々あるだろうっていうこ[とで]
 13 A: [うん:ん。
 14 B: データを:とったんですよ
 15 A: うん。

詳細な分析は後述するが、ここでは1点指摘する。断片(1)においてAとBは敬体で会話を交わしており、これまでの先行研究に従うならば「はい」で反応すべきである。しかし、実際にはそうっていない。聞き手Aは基本的には「うん」(06行目, 08行目, 13行目, 15行目)を用いる一方で、説明開始の冒頭03行目とその後の11行目で「はい」を用いている。筆者はこうした現象を観察する過程で、これらの形式間の使い分けには丁寧さだけではなく、相互行為の展開におけるなんらかの秩序が関わっているのではないかと考えた。具体的には、11行目で「うん」ではなく「はい」による反応が選択される点に注目し、この産出は直前にBが行っていることと関係があると判断した。Bは09行目の「その問題が」の後の中断によって自己開始修復(Schegloff et al. 1977)を行う。その修復は、Bの言い間違えといったものではなく、「その問題」に関わる「聞き手A」に向けた「説明の差し挟み」と理解できる。そして、聞き手が11行目で「はい」を選択しているのは、説明者(ここではB)によって聞き手(ここではA)に向けた対処が行われたことを(聞き手が)理解したことを表示するためなのである。以下では、この点についていくつかの類似した事例を用いて、詳細に分析する。

まず2節では、「うん」「はい」の使い分けに関わる先行研究と課題についてまとめる。そして、3節で本稿で明らかにする点を提示し、4節で扱うデータについて述べる。5節以降で具体的な分析と考察を行う。

2. 先行研究

2.1 「うん」と「はい」の使用の実態

実際の会話データを書き起してみると「はい」よりも圧倒的に「うん」が頻繁に使用されることが多いという直観を持つ。特に、筆者が書き起こしたインタビューデータにおいては、既に断片(1)で示したように、互いが敬体(ですます体)で話しているにもかかわらず、「うん」が用いられることもある。このことは、話し手が丁寧さという観点以外の基準によっても、形式を使い分けしている可能性を示しているように見える。

実際に、いくつかの先行研究を見てみると、「はい」よりも「うん」が頻繁に使用されるとい結果が得られている。大浜(2006)では、一人の女子学生(20代)を固定し、世代と性が異

なる相手にインタビューを行ったデータを収録した。その会話（総会話時間 2 時間 31 分 53 秒）中で、最も頻度が多いのは「うん」であり、全体（全累積使用回数 2678 回）のうちの 35.6%（954 回）を占めていることが報告されている（大浜 2006: 172）。また、この数字は「うん」の次に多い「あー」（9.7%（259 回））と比べても「圧倒的優位にある」（p.172）こともわかっている。一方、「はい」は 2.9%（78 回）となっている³。

更に大浜（2006）は、会話の相手による使い分けについて世代差という観点から調べ、興味深い結果を提示している（表 1 参照）。

表 1 会話相手の世代による相づち表現系・型別の使用数とその割合

	同世代へ		年上世代へ	
	使用回数	割合	使用回数	割合
あ系	144	15.6	147	21.5
うん系	412	44.6	229	33.5
え系	53	5.7	16	2.3
はい系	37	4.0	51	7.5

（大浜 2006: 182 表 8-5 より引用 筆者が関心のある表現 4 種のみ抜粋。太字は筆者による。）

このデータによると、同世代の相手に対してより多く使用される傾向があった表現として「うん系」を認めているものの「はい系」が用いられることもあること、逆に、年上世代に対してさえも「うん系」の使用が「はい系」を上回っていることが示されている。つまり、丁寧さという観点から考えると使いにくいはずの「うん系」が会話相手の世代に関わらず用いられているのである。同様に、世代が異なる会話者が、同一のインタビュアーに対して用いた形式についてもやはり「うん系」が「はい系」に比べて圧倒的に多いことが示されている（表 2 参照）。

表 2 使用者の世代による相づち表現系・型別の使用数とその割合

	同世代		年上世代	
	使用回数	割合	使用回数	割合
あ系	60	9.9	23	4.9
うん系	279	46.1	284	60.8
え系	40	6.6	0	0.0
はい系	26	4.3	17	3.6

（大浜 2006: 185 表 8-7 より引用 筆者が関心のある表現 4 種のみ抜粋。太字は筆者による。）

また、中島（2000）は、対面会話におけるあいづちの使用頻度を場面のあらたまり度の観点から調べ、その中でもやはり「うん」の使用がどの場面においても「はい」を上回っていることを根拠に「うん」が「インフォーマルな場面だけでなくフォーマルな場面にも多用され、その出現要

³ 大浜（2006）は頻度を数える際に、「はい」と「はいはい」を一括りにし、「あ系」「うん系」「え系」「はい系」などのようにまとめている。

因はあらたまり度に関係ない」(p. 112) と結論付けている。このことは従来丁寧さによる使い分けを基本として提示されてきた「うん」「はい」が必ずしも入れ替え可能なものではない可能性があることを示唆している。従って、個々の形式が会話の中のどのような位置において用いられ、具体的にどのような役割を担っているのかを実際のデータをもとに詳細に記述していく必要がある。

2.2 「うん」「はい」の使い分けを指摘する研究

富樫(2002)は「「はい」「うん」の本質が丁寧さというファクターを用いて記述すべきものではない」(p. 128) く「話し手自身の知識状態が主たる基準となっている」(p. 135) ことを記述している。その中で、富樫は「はい」は「積極的に聞いている」態度を示す場合に用いることができると述べる。具体的には、「ある談話のある時点において、活性化している情報には常に関連する半活性化情報が存在する」(p. 144) という。その半活性化情報とは、例えば「きのう、隣のクラスのAちゃんがねー」と聞くとき「きのう」「隣のクラス」「Aちゃん」それぞれに関する情報、加えて当該発話をいつ誰が発しているのかといった発話状況に関する情報等を経験的な知識から呼び出し、容易にアクセス可能な状態にすることである。これを元に、富樫は「はい」「うん」は「ある情報を得た際に、話し手の知識データベースにある当該情報と連関する情報が呼び出されたことを示す標識と考えることができるのではないか」(p. 145) とし、「この連関する情報こそが半活性化情報であり、「はい」「うん」は活性化情報が半活性化情報とつながる処理のポイントを示している」(p. 145) と述べる。そして以下のような例を用いて両者の説明を試みている。

(友人同士の会話)

A 昨日の新聞にさ、おまえの名前載ってたぞ。何で?

B うん あー、はい (富樫2002: 147 (63))

富樫は、上記の「うん」「はい」の混在を指摘した上で、「うん」が発せられる時点においては、呼び出された半活性化情報がそれほど多くなく、「はい」の時点ではより多く呼び出されていることから上記のように用いられるとする。つまり、「うん」は「情報がそれほど呼び出されていない」(p. 148) ため、「結果として、「ただ単に聞いている」という態度につながる」(p. 148) とする。一方「はい」では、「発話の背後では多数の半活性化情報が連関性を持って処理(呼び出し)されているため、逆に「ただ単に聞いている」という形では解釈されにくい」(p. 148) と両者の違いについて説明する。富樫の両者の使い分けに関する記述には、一定の説得力があると思われる。しかしながら、富樫は作例を用いた分析に留まっており、「半活性化情報が連関性を持って処理されている」ことを実際のデータからどのように検証するかが不明である。従って、実際のデータを用い、会話参加者のやり取りに即した詳細な分析が必要である。

2.3 会話分析における研究

相互行為の観点から、高木(2008)は「治療的面接場面」においてカウンセラーがクライアント

トの語りに対して「うん」「はい」の両方を用いて反応を示す事実に着目した。高木は50分のデータの中に見られる様々な「うん」から「はい」への切り替わりをとらえ、網羅的に記述している。その中で「相互行為上のトラブルへの対処に対する反応」(p. 59)として「はい」が用いられることを複数の事例に基づき記述している。本稿で対象とする現象は、高木(2008)が示した話し手が「一方的に発言を進めるのではなく、潜在的な、もしくは、顕在化したトラブルに志向」し、「そのことが、受け手にとって(また、分析者にとっても)観察可能であり、受け手もまたそれに感応的に反応を示している」(p. 59)事例と重なっている。しかし、高木は自己開始修復にのみ焦点をあてているわけではない点、そして高木自身も述べるように制度的場面において明らかにされた秩序性が他の相互行為場面においても観察されるか否かについて、更なる検討の余地がある。

3. この研究で明らかにすること

本研究では高木(2008)と同様の立場から、従来丁寧さを基準に使い分けられていると考えられてきた「うん」「はい」が、実際には相互行為の中で行われる活動に密接に関わる形で用いられていることを示す。本稿では、話し手と聞き手の役割が固定され、聞き手の反応が抽出しやすいインタビュー場面の相互行為を分析する。そして、インタビュイー(以下、説明者)が説明の途中で発話を途切れさせたり、説明の流れを止めたりすることによって、説明の聞き手(以下、聞き手)に向けた対処を開始し、ことばの言い換えや詳細な説明を通して対処を完了することがデータの中から比較的容易に記述可能な自己開始修復(self-initiated repair)(Schegloff et al. 1977)を行う事例に焦点をあてる。特に、高木の指摘を踏まえつつ、説明者が説明中のことばの使用に関して、聞き手の理解に対する潜在的または予測されるトラブルに志向した対処としての自己開始修復が行われることに注目する。以下では、そうした自己開始修復の前後で「うん」を基本とした反応を示していた聞き手が、「はい」を用いて反応を示すことがあることを示す。そして、このときの聞き手の「はい」による参入の位置の詳細な分析を行うことによって、「はい」の選択が偶然的になされたものではなく、そこには一定の秩序だった規則があることを指摘する。なお「うん」「はい」以外にも、「ええ」の使用や、「ええ」が連続する中で「はい」、「うん」の中で「うんうん」に切り替わるといったものも筆者の関心の射程に入る。ただし、本稿ではひとまず「うん」が「はい」に切り替わる現象にのみ注目する。

4. データ

分析に使用するデータは「日本語話し言葉コーパス(Corpus of Spontaneous Japanese: CSJ)⁴」の「学会講演インタビュー」、「模擬講演インタビュー」のインタビューデータである。使用したデータは約5時間分の音声データである。インタビュアーは学会講演インタビューについては予稿集に事前に目を通し、模擬講演インタビューについては模擬講演を聴いた上でインタビューに臨んで

⁴ CSJは、国立国語研究所、情報通信研究機構(旧通信総合研究所)、東京工業大学が共同で開発した、大規模な話し言葉データベースである(国立国語研究所2006等)。

いる。会話は主にインタビュアーがインタビュイーに対して質問を投げかけ、それに応答するという形で進められている（国立国語研究所 2006: 5-6）。

5. 分析

以下に示す断片は、いずれも A（インタビュアー）が「（説明の）聞き手」、B（インタビュイー）が「説明者」である。説明者 B は A からの質問に応答する過程でなんらかのトラブルに直面する。そして、自己開始修復を行うことによって、トラブルの解決を試みる。以下で注目する聞き手 A の応答「はい」は、その自己開始修復の過程において産出される。「→」で示すのが自己開始修復の操作部、「⇒」で示すのがその過程でなされる「はい」による聞き手の反応である。

断片(2) [CSJ:D04M0052 問題](=断片(1))

- 01 B: .hまああの:h(0.2)この:う:ん(0.2)
 02 ま ここでやってるような<分析自体>は:
 03 A: はい
 04 B: あの:(0.4)まあ(0.9)一人hええ(0.8)まあデータをとりたい.(.)
 05 こういうu:対面のブースン中で:
 06 A: ↑う↓ん[:
 07 B: [ええ:人間と機械(.)i:(0.2)の,対話をとりたい_(0.9)で,(.)
 08 A: ゝう[ん°
 09 B: [そん中に:その:色んなね?(0.2)その問題が-(0.2)
 10→ 問題っていうのはしゅ-機械が処理する上での,
 11⇒ A: はい
 12→ B: え:難しい問題っていうのが色々あるだろうっていうこ[とで]
 13 A: [ゝう:ん°
 14 B: データを:とったんですよ
 15 A: ゝうん°

ここではまず、A は B が行った研究に関して、そもそもなぜそうした研究を B が行うに至ったかを問う（断片外）。それに対し、B は行った研究の目的の一つが「人間と機械の対話をと」る（07 行目）ことにあったと述べる。そして、その上で「色んな」「その問題」（09 行目）に直面することを述べようとする。さて、注目したいのは、その説明の過程で提示した「その問題」（09 行目）に関して B が自己開始修復を行う点である。09 行目で B は「その問題が」と一旦発話を試みた後、発話を一旦途切れさせ、0.2 秒の短い間をあける。こうした B の発話の組み立ての慎重さから、B が聞き手の理解に配慮しつつ慎重に「問題」ということばを産出することが観察できる。そして、実際に「問題っていうのは」（10 行目）と言って「問題」がどのようなものであるかの説明を加える。この時 B は「っていうのは」という形式を用いる。これは「X というのは Y」と一般的に X に関する説明を行う際に用いる表現であると考えられる。この表現を用い

ることによって、これから行う修復が（単なる言い間違えなどによるものではなく）目の前にいる A の適切な理解に志向した説明であることを言語的に明確に示している。そして、「機械が処理する上での」（10 行目）と言うことによって、「色んな」（09 行目）と漠然と示されていた「問題」に具体的な情報を加え、「難しい問題」（12 行目）と修復を完了する。

一方、そうした説明者 B の行為に対し、聞き手 A は 08 行目までで基本的に「うん」で反応を示している。しかし、注目したいのは 11 行目の「はい」である。このときの A の「はい」には次のような特徴がある。まず、それまでの「うん」を用いた反応と比較すると音声的にも明瞭で際立った音でなされている。更に、その産出の位置に注意したい。この「はい」は、10 行目で説明者が「機械が処理する上での」と「の」に強勢を置いた⁵その後の位置で産出されている。つまり、この聞き手の参入の位置は、12 行目の「難しい問題」で修復が完了する直前、しかし修復が完了することが聞き手にとって理解可能な最初の位置であると考えられる。こうした位置において他と区別されるような形式、音調を伴って反応することによって、聞き手は説明者の聞き手に対する対処を理解していることを示していると考えられる。聞き手の反応の形式と、参入位置が修復の完了と関わっていることが単なる偶然ではないことは、次に示す他の事例から更に明らかになる。

断片 (3) を見てみよう。この断片でも同じような位置で聞き手の「はい」を用いた反応が産出されている。A は B が研究をしている「音声認識」がゆくゆくはどういった場面で使われていくのかと質問をする。それに対し、B は音声認識だけではなく音声認識をした後で要約して「プロトタイプ」を作るといえることができると説明する（断片外）。以下の断片では、その結果更にもどのようなことに役立てられるのかについて B が具体的に述べている。

断片 (3) [CSJ:D04M0029 文字]

- 01 B: で、例えば(.)あの:具体的には:h最近あの:エネエチケー((NHK))
 02 A: ん[:
 03→ B: [でこう(.)も-も-文字:- (0.5)
 04→ し↑た↓にこうアナウンサーがこうしゃべった
 05→ >やつが<こう下[に出]るよう[な
 06⇒ A: [ん:] [は:い
 07→ B: あの:もの-(.)ま普通にはこう出てないん
 08 ですけどそれを:することも可能な[んですね.h
 09 A: [ん : :
 10 B: でそういう風に(.)

⁵ 聞き手の「はい」産出の直前において説明者の発話に強勢が置かれることは断片 (4) でも観察される。この直後の位置において、聞き手の特別な反応が求められることが、説明者の発話の組み立てだけではなく音調によっても際立たされていることを示している可能性がある。今後は、身体的動作（例えば説明者の頭の傾き）なども視野に入れて詳細な分析を試みたい。

Bは「例えば」(01行目)から、音声認識のシステムを使うとゆくゆくはテレビのテロップのようなものを作成することが可能であるということを具体的に説明する。その際、Bは慎重に発話を組み立てている。その慎重さは、01行目の「例えば」後の短い間、「あのー」の使用、「具体的には」のあとの語尾の引き延ばし、03行目の短い間や「文字」を産出するまでのことばの途切れから観察できる。そして、「文字」を産出した後、語尾を引き延ばし、発話を中断する(03行目)。直後の0.5秒の間によって発話産出の進行性に淀みが生じていることが観察できる。そして「したにこうアナウンサーがこうしゃべったやつがこう下に出るような」(04行目, 05行目)と「文字」がどのようなものであるかの詳細な説明を試みる。つまり、この発話の組み立てにおいて、トラブル源は「文字」であり、その操作は発話の中断によって開始され、「文字」がどのようなものであるかの具体的な例を差し挟む行為がなされている。そして、「文字」と同じ名詞の「もの」(07行目)の産出によって、「文字」の修復が完了したことを明示し、説明の本線に復帰する。

一方、このときの聞き手の反応を見てみよう。Aは基本的には「んー」で反応を示している(02行目)。修復の操作の途中で再度「んー」(06行目)で反応することによって、Bの説明が未だ継続中であることを理解していることを示す。そして、05行目の後半「下に出るような」で「文字」に関する説明が完了することが文法的にも意味的にも予測できる最も早い位置において「はい」が産出されている。つまり、この位置でAが参入できることは、断片(2)と同様、Aが聞き手として説明者の自己修復の開始と完了の位置を適切に把握していることを裏づけている。

更にもう一つ類似したデータを見てみよう。

断片(4) [CSJ:D04M0047 光]

- 23 B: (だ)そういう:ものが,ある[かない]かって
 24 A: [ん:]
 25 B: のを(.).hとにかく(.).ベルトコンベアで
 26 A: ええ
 27 B: 流れてくるやつを[いっこ]いっここう:(咳払い)
 28 A: [ええ]
 29 B: 光をあてて,=
 30 A: =ああ:[:]((か細く平坦な音調で発せられている))
 31→ B: [ひか]りをあててってのは
 32→ こう.h映像っていうかね?[あの]:光源をあてて,=
 33 A: [ん:]
 34⇒ A: =はい
 35 (0.6)((Bの唾を飲む音))
 36 B: でえ:とチェックして,
 37 A: ん:[: : :]

この断片に先立ち、Bは以前の職場での経験について語っている。その過程で、AはBが新入社員のときに実習先の工場で行った「ブラウン管の検査」がどのようなものだったのかと質問をする。それに対して、Bはブラウン管に傷があると商品にならないことを説明した上で、検査では「そういうものがあるかないか」(23行目)、つまり傷のあるブラウン管がないかを「ベルトコンベアで流れてくるやつをいっこいっこ」(25行目、27行目)「光をあてて」(29行目)確認する作業を行うのだと説明を試みる。従って、29行目の「光をあてて」という発言は、検査のやり方の説明に関する一つの区切りとして聞かれる。そのため、この区切りに達した位置において、質問をなげかけたAには何らかの反応をすることが求められる。実際にAは「あー」(30行目)と反応を示す。しかし、この「あー」は平坦な音調とか細い声で発せられており、特別に何かを理解したことを主張しているようには聞こえない。むしろ、質問の応答に対するなんらかの反応を示すべき位置において曖昧な音調で反応を示すことは、それまでのBの説明に納得ができていないこと、または理解に不安があることを表面化させることとなるだろう。実際に、そうしたAの反応を受け、説明者Bは「光をあてる」ことがどのようなことであるかに関して断片(2)同様「～ってのは」という形式を伴い、Aの理解に志向した詳説を試みる。まず「こう映像っていうかね」と「光をあてる」ことの最初の説明を行う。このとき、Bは発話の語尾を上げる。それに対しAは「んー」(33行目)とそれまでの反応と同じ反応を示し、Bの更なる説明を促す。実際にBは説明を続け「あのー光源をあてて」(32行目)と今度は「光」から「光源」というより専門的なことばに言い換える。これが言い換えであることは、Bが一度29行目で産出したのと同じ「(を)あてて」という動詞を強勢をおいて用いることからわかる。こうした発話の組み立てによって、Aの理解に志向した詳説の完了が近づいていること、つまり、トラブルの修復の操作の完了を迎えていることが際立たされる。であるならば、今この位置においてAはなんらかの反応をすべきことが適切になる。実際にトラブルの修復の操作が完了したとわかるまさにその直後の位置でAは(「うん」ではなく)「はい」と言う。このことから、Aが用いた「はい」は、そもそものトラブル源となっていた「光をあてて」が一体どのようなものであるかに関する説明が完了したと見ることのできる直後の位置に置かれていると理解できる。

6. 分析のまとめ

ここまで見てきた断片(2)～(4)の共通点、相違点を整理しよう。第一に、断片(2)(3)で説明者が行う自己開始修復は、トラブル源となる特定のことば(「その問題」(断片(2)09行目)、「文字」(断片(3)03行目))の直後において、発話を中断するところから開始されている。そして、少しの間をおいたあとにトラブル源と同じターン内で修復の操作が開始されるという点で共通している。一方、断片(4)は「光をあてて」の直後に聞き手の「あー」という反応がなされ、その後に修復の操作が開始されている。従って、修復の操作の開始位置という意味において、断片(2)(3)とは若干異なっている。しかしながら、「光をあてて」という発話は説明の一つの区切りではあるものの、Bのブラウン管の検査全体の説明の終わりにはなっていない。それゆえ、Aにとってみると31行目から開始される「ひかりをあててってのは」は、断片(2)(3)

と同様に、Bの説明の途中で一旦流れを止めて開始され、Bの発話ターンが維持される中でなされた修復として理解できるだろう。

第二に、修復の操作のやり方についてである。ここでも断片(2)(3)と断片(4)には多少の違いがある。断片(2)(3)では、それぞれ「問題」「文字」に対して「機械が処理する上での難しい問題」「したにこうアナウンサーがこうしゃべったやつがこう下に出るようなもの(文字)」と詳細な説明が付け加えられている。一方、断片(4)は「光をあてて」から「光源をあてて」へとより専門的なことばに言い換えられている。しかしながら、いずれも特定のことばに関して聞き手の正確な理解に志向した形でことばの説明がなされているという点で共通している。

第三に、聞き手の「はい」が産出される位置を整理しよう。断片(2)～(4)全てに共通して言えるのは、「はい」が説明者の修復の操作が完了するとわかる可能な限り早い位置に置かれているという点である。理解のために連鎖の流れを示す。

- 01 トラブル源
- 02 修復の開始(例)～って言うのは／～というのは
- 03 修復の完了(または、完了が予測可能な最初の位置)
- 04 「はい」

断片(2)では「処理する上での」の直後、次に名詞が置かれることが予測可能となる位置において「はい」が産出される。断片(3)でも同様に、「下に出るような」の直後、やはり次に名詞が来ることが予測できる位置において「はい」が産出されている。断片(4)では「光をあてて」を「光源をあてて」と言い換えたことがわかる最初の位置において「はい」が産出されている。つまり、いずれの事例においても修復の操作が完了することが意味的にも文法的にも聞き手にとって理解可能となる位置において「はい」が産出されている。そして、「はい」が産出された後、説明者は一旦逸れたことばの補足説明の連鎖から本線に戻り、元の説明に復帰している。このことは、説明者が修復の操作によってなされたことが聞き手に理解されたものとし、説明を継続していることを示している。

7. 考察

5節、6節で見てきた事例における修復は、いずれも単なることばの言い間違えといった発話産出上のトラブルではなく、聞き手の理解に志向した「聞き手に向けた説明」として聞くことができるものであった。つまり、修復の操作において産出された発話は、発話の途中で説明者自身が聞き手の理解のためにあえて「差し挟んだもの」として理解できる。こうした発話の産出途中でなされる補足的な説明は、説明全体を「本線」ととらえたときに、差し挟まれた「副次的な連鎖」としてとらえられる。こうした発話の中に見られる一種の構造化については、林(2005)の「メイン・アクティビティー」と「サイド・アクティビティー」という概念や、それを援用した船橋(2011)が参考になる。船橋(2011)は独話を対象とし、話し手の発話の過程「一文節を分断する形で補足的な注釈がくわえられているもの」(p. 106)を「注釈挿入」と呼んだ。船橋は、

会話分析研究者である林（2005）を参考に注釈挿入を「アクティビティー」という観点からとらえ、日本語教育文法における貢献という目的のもと「MA（メイン・アクティビティー）とSA（サイド・アクティビティー）」という発話構造上の別を聞き手が把握できるよう、言語的にいかに工夫をしているか、発話構造の有標化が言語的にどのように実現されているか」（p. 110, MA と SA の説明は筆者が挿入）を明らかにした。また、高梨・丸山（2007）でも船橋（2011）と同様の現象が扱われている。本稿で扱う説明者の自己開始修復と、それに対する聞き手の反応をとらえるとき、こうした発話の構造化という観点から発話を理解することが有益である。

本稿で扱った説明者の自己開始修復のうち、ある特定のことばについて説明を差し挟むことは、説明を試みる連鎖途中で説明者が聞き手の理解になんらかの潜在的な問題を感知し、発話を中断して聞き手に向けて補足的に説明を差し挟む行為としてとらえられる。そうした説明の差し挟みは林（2005）の「MA（メイン・アクティビティー）とSA（サイド・アクティビティー）」という観点から考えると、SAにあたる。そして、興味深いことに聞き手の「はい」を用いた反応が行われる位置は、説明者が説明の途中でSAを行い、再びMAへと復帰する発話の構造上の焦点においてなされていると言える。図示すると以下のようなになる。

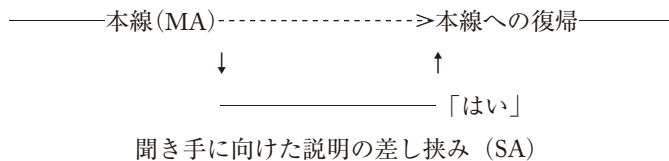


図1 聞き手に向けた説明の差し挟み／聞き手の反応

聞き手があえて「はい」による反応を示した位置は、そうした説明者の発話が逸脱したSA、つまり解説部分から本線へと復帰することが予測可能となる位置である。このことは、聞き手が説明者の進行中の発話において今ここでなにが起こっているのか、もしくは、説明者によってどのような行為が行われているのかを理解し、それに沿う形で短い反応のバリエーションをも調整していることを示している。聞き手はそれまでの「うん」による反応を産出するのではなく、あえて異なる形式を選択することによって、そこまでとは異なる活動が行われたこと、そしてそれを理解したことを示している。

更に、聞き手の反応において重要なことは、説明者が「聞き手に向けて」行った対処の内容についても理解していることを、それまでとは異なる反応の仕方でも示していることである。以下の断片（5）では、話し手は自らの説明の過程で直面したことばの正確な描写に志向して、ことば探しを始め、その結果として産出されたことばの直後に聞き手が（「はい」ではなく）「はいはい」と反応を示す。このことは、必ずしも「うん」から「はい」だけが用いられるわけではないことを示している。

断片(5) [CSJ:D04M0050 都県]

- 01 B: .h最初は:最初のこう意図として[は]
 02 A: [え]え
 03 B: (0.7)あの関東っていうのは[h] え:と多分こうすごく:
 04 A: [ん:]
 05 B: あの:差が:(0.2)少ないんじゃないか[っていう予そ]うが
 06 A: [うん : :]
 07 B: あっ[たんですね?][寄せ集め]の:人が.h
 08 A: [ええ ええ][うんうんうん]
 09 う[んうんうんうん]
 10 B: [だから: あの]だいたい色んなところ
 11 から来て[て:]
 12 A: [うん:]
 13 B: .hでそんなに関東である:h四つの県[四つの-]四つの-ええと:(0.5)
 14 A: [う : ん]
 15→ B: 都県を
 16⇒ A: はい[はい
 17 B: [調査したんです[けど]
 18 A: [うん]

ここでは、AはBが行った研究（言語調査）においてなぜ関東と関西の比較を行ったのかという質問をする。Bは01行目からその理由説明を開始する。Bは関東の四つの都県で調査を行ったことを述べる。その過程で「県」ではなく東京都を含めた「都県」という表現のほうが適切であることに志向し、言いよどみつつ、ことば探しを試みる（13行目）。そして0.5秒の間（13行目）を経て「都県」と発する。この直後の位置において、Aはそれまでの反応とは明らかに際立った「はいはい」と反応を示す。つまり、「四つの県」（13行目）が発せられた位置においてはAはそれまでと変化のない「うーん」（14行目）という反応によって、とりあえずそこが理解を示す一つの区切りであることを示しているように見える。そして、その次に発せられる「はいはい」（16行目）は、「(四つの) 県」をトラブル源とする自己開始修復の操作が完了した位置において産出されている。聞き手は修復活動が完了したことを理解するとともに、それについての理解には何も問題がなく説明者が話を前に進めてもよいことを示している。従って、ここでAが行っていることというのは、A自身の理解の問題が解決されたことを単に主張しているというよりも、むしろ説明者が今ここで聞き手に向けて挿入的に行った補足説明の構造をとらえ、「あなたが配慮してくれたことばの正しい理解ができたので、説明を前に進めていいですよ」と説明を進める上での問題がないことを示しているのである。その際に、「うん」と「はい」「はいはい」といった形式間の差異が利用されていると考えられる。

こうした形式間の差異化が相互行為上の仕事に関わっていることは西阪（2007）が常体と敬体の使い分けについて記述していることとも重なる。西阪は「基底になる（核になる）行為連鎖タイプにおいて敬体が用いられるのに対して、そのための準備となるような連鎖においては、常体が用いられることがある」と述べている。その一例として挿入連鎖を取り上げている。

断片(6) (西阪2007: 58 断片(3)[整形外科]より抜粋)

- 01 C: 何をやりたいというのはまだ,決めて
 02 いないんですか?
 03 B: ん,一応,外科:の方へ行き[たい,=
 04 C: [外科.
 05 B: =整形外科 ()
 ((...))
 06→ A: 切り刻んだりするんですか?
 07 B: はい?
 08→ A: 切り刻んだりするの?
 09 B: いま:?
 10 A: や:(.)げ-(.)げか(.)整形外科:
 11 だから.

この事例において、AはBに敬体で質問をする（06行目）。隣接ペアの第一対成分である質問の次にくるべきは第二対成分の応答である。しかし、次の07行目でBは聞き返しを行う（07行目）。すると、次の行でAは常体で「切り刻んだりするの」（08行目）と発言する。この発言は、06行目で一度Aが聞いた質問の繰り返しである。このことから、AはBが06行目の発話に聞き取り上の問題を抱えていたものとして理解したことがわかる。西阪は常体が挿入連鎖において用いられていることに注目する。つまり、「本筋から、なんらかの形で（その本筋を完遂するための準備としてであれ、余談としての冗談としてであれ）退くことを際立たせるための、相互行為的な手段の1つと言えるかもしれない」（西阪2007: 69）ことを指摘する。そして「敬体と常体の使い分けが、単に参加者間の親密度のような、相互行為そのものにとって外在的な様々な属性に依存するだけではなく、「むしろ、相互行為の組織そのものための重要な資源として、当人たちにとって利用可能なものである」（西阪2007: 75）と結論づけている。

本稿で分析を試みた事例は、聞き手の反応に関するものであったという点で西阪（2007）の分析とは異なっている。しかしながら、西阪（2007）が指摘するのと同様に、聞き手もまた、常体・敬体と呼ぶことのできる「うん」「はい」という形式の差異を単に丁寧さという観点からだけではなく、説明全体の構造化に敏感に反応し、説明者の発話の組み立てに沿う形で反応を調整する際のリソースとして用いていると考えられる。

8. 結論

本稿では、説明者が説明を滞りなく展開しつつも、聞き手が理解できるよう慎重に発話を組み立て、それに対して聞き手もまた説明者の進行を邪魔しない形で、しかし、発話の構造化にその都度敏感に反応しながら会話に参加していることを記述してきた。こうした説明者の発話の構造化は聞き手の立場から考えると、聞き手は積極的に聞く態度を示しながらも、全ての情報を同じように受け止めるだけではなく、短い反応にも濃淡を付けながら聞く際のリソースとなっているのである。聞き手は、ある説明については、「うん」を用いて説明者の説明を促すことをするかもしれない。また一方では、特別に反応が必要なものとして取り扱う。その際、聞き手は説明者の説明の流れを滞らせない方法で、しかし説明者が提示する情報を確実に受け取ったことをそれまでとは差異化されたやり方を用いて示すのである。それによって、聞き手が積極的に相互行為に関わるものとしての適切な振る舞いを実現している。船橋（2011）などは独話を対象としているため聞き手が実際にどのように理解し、反応を示しているかを扱いきれなかった。しかし、本稿の分析によって、聞き手が説明者の言語的工夫を理解し、そうした発話をどのように取り扱っているのかの一端を示すことが可能となった。

最後に今後の課題について述べる。第一に、今後は「うん」から「はい」への使用だけではなく、「はい」から「うん」といった逆方向の使用、「うん／はい」から「ああ」「あっ」など他の形式や「うん」から「うんうん」のように複数重ねて用いられる形式も射程に入れて、データ数を増やし、詳細な分析を試みたい⁶。第二に、今回用いたデータは音声データのみであったために音声以外の側面を検討できなかった。しかし、聞き手の反応の産出には、説明者の発話中の領き、視線、表情、身体動作なども関わる可能性がある。今後は映像データを含めて分析を試みたい。

参考文献

- 船橋瑞貴（2011）「注釈挿入の発話構造と言語形式—言語による発話構造の有標化」『日本語文法』11(1): 105-121.
- グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』東京：くろしお出版。
- 橋内武（1988）「会話のしくみを探る」『日本語学』7(3): 43-51.
- 畠弘巳（1988）「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」『日本語学』7(3): 100-117.
- 林誠（2005）「『文』内におけるインターアクション—日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって」申田秀也・定延利之・伝康晴（編）『シリーズ文と発話 1—活動としての文と発話』1-26. 東京：ひつじ書房。
- 堀口純子（1987）「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64: 13-26.
- 堀口純子（1991）「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』10(19): 31-41.
- 岩田夏穂・初鹿野阿れ（2012）『にはんご会話上手！聞き上手・話し上手になるコミュニケーションのコツ 15』東京：アスク出版。
- 国立国語研究所（2006）『日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所報告 124. http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/k-report-f/CSJ_rep.pdf（2015年7月15日参照）
- 申田秀也（2006）『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共—成員性」をめぐる参加の組織化』京都：世界思想社。

⁶ 現時点で筆者は「はい」という形式が「うん」に比べて話し手が特別なことを行ったときに用いられる可能性があると考えている。それは、「うん」よりも「はい」のほうが意識的に口を開けて発声しなければならないといった身体的な負荷に加え、従来の先行研究で（場面や話し手らの関係性に関係なく）「はい」の使用頻度が「うん」よりも圧倒的に低くなっているという事実と関連していると思われる。今後の課題である。

- 松田陽子 (1988) 「対話の日本語教育学—あいづちに関連して—」『日本語学』7(12): 59-66.
- Maynard, Senko K. (1990) *An introduction to Japanese grammar and communication strategies* 日本語の文法とコミュニケーション・ストラテジー. Tokyo: The Japan Times.
- 水谷信子 (1983) 「あいづちと応答」水谷修 (編) 『話しことばの表現 講座日本語の表現 3』37-44. 東京: 筑摩書房.
- 水谷信子 (1984) 「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」金田一春彦博士古稀記念論文集編集委員会 (編) 『金田一春彦博士古稀記念論文集 第二巻 言語学編』261-279. 東京: 三省堂.
- 水谷修 (1991) 「会話研究の新開拓」『日本語学』10(10): 4-9.
- Mizutani, Osamu and Nobuko Mizutani (1977) *Nibongo notes 1*. Tokyo: The Japan Times.
- 中島悦子 (2000) 「あいづちに使用される「はい」と「うん」—あらたまり度・待遇度から見た出現実態—」『ことば』21: 104-113. 現代日本語研究会.
- 西阪仰 (2007) 「行為連鎖のなかの敬体と常体」『明治学院大学大学院 社会学専攻紀要』31: 55-78.
- 西阪仰 (2008) 『分散する身体—エスノメソドロジー的相互行為分析の展開』東京: 勁草書房.
- 岡崎敏雄 (1987) 「談話の指導—初～中級を中心に—」『日本語教育』62: 165-178.
- 大浜るい子 (2006) 『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』広島: 溪水社.
- Schegloff, Emanuel A. (2007) *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis Volume 1*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel A., Gail Jefferson & Harvey Sacks (1977) The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language* 53(2): 361-382.
- 高木智世 (2008) 「相互行為を整理する手続きとしての受け手の反応—治療的面接場面で用いられる「はい」をめぐる—」『社会言語科学』10(2): 55-69.
- 高梨克也・丸山岳彦 (2007) 「自発的な話し言葉に見られる挿入構造と線状化問題」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『シリーズ 文と発話 3—時間の中の文と発話』67-102. 東京: ひつじ書房.
- 武田誠・徳永あかね・山田悦子 (2014) 『日本語でインターアクション INTERACTION in JAPANESE』サウクエン・ファン (監修) 吉田千春 (編著) 東京: 凡人社.
- 富樫純一 (2002) 「「はい」と「うん」の関係をめぐる」定延利之 (編) 『「うん」と「そう」の言語学』127-157. 東京: ひつじ書房.
- 富阪容子 (2005) 『なめらか日本語会話 新装版』東京: アルク.
- 山本真理・柳町智治 (2014) 「インタビュー場面における聞き手の理解の表示—話し手の自己開始修復連鎖における聞き手の反応に注目して—」『社会言語科学会第 34 回大会発表論文集』174-177.

【付録】

会話データの転記は Gail Jefferson によって開発されたシステムを参考にしている。以下、記号の意味の説明は『社会言語科学』(2008) Vol. 10, No. 2 で用いられた一覧と串田 (2006), 西阪 (2008) を参考にした。

[オーバーラップの開始位置。
]	オーバーラップの終了位置。
=	末尾に等号を付した発話と冒頭に等号を付した発話との間に感知可能な間隙がまったくないことを示す。
(数字)	丸括弧内の数値は、その位置にその秒数の間隙があることを示す。
(.)	その位置にごくわずかの感知可能な間隙 (概ね 0.1 秒前後) があることを示す。
:	直前の音が引き延ばされていることを示す。コロンの数により相対的な引き延ばしの長さを示す。
-	直前の語や発話が中断されていることを示す。
.	直前の部分が下降調で発話されていることを示す。
?	直前の部分が上昇調で発話されていることを示す。
,	直前の部分が継続を示す抑揚で発話されていることを示す。例えば、直前の部分が少し下がって弾みがついて発話されるなど。
—	直前の部分が平坦な音調で発せられ、発話が継続するように見せることを示す。

↑文字	矢印の直後の部分で、急激な抑揚の上昇があることを示す。例えば同じ話者の前後の発声に比べて音量が大きい場合、音が高くなっている場合などがある。
↓文字	矢印の直後の部分で、急激な抑揚の下降があることを示す。例えば同じ話者の前後の発声に比べて音量が小さい場合、音が低くなっている場合などがある。
文字	下線を引いた文字が相対的に強い音調で発話されていることを示す。
◦文字◦	この記号で囲まれた部分が弱められて発話されていることを示す。例えば、同じ話者の前後の発話に比べて音量が小さい場合など。
h	hは呼気音を、hの個数はその相対的な長さを示す。この記号は「ため息」「笑い」などいくつかの種類異なる振る舞いを示す。
.h	ドットに続くhは吸気音を、hの個数はその相対的な長さを示す。この記号は「息継ぎ」「笑い」などいくつかの種類異なる振る舞いを示す。
<文字>	不等号で囲まれた部分が、前後に比べてゆっくりと発話されていることを示す。
(文字)	丸括弧内の文字の聞き取りに自信が持てない場合の表記。
()	聞き取り不可能な箇所は、()で示す。空白の大きさは、聞き取り不可能な音声の相対的な長さに対応している。
(())	発言の要約やその他の注記は二重括弧で囲む。
→	分析において注目する行。
⇒	

Differences in Interactive Usage of Japanese Recipient Response Tokens *un* and *bai*

YAMAMOTO Mari

Waseda University / Project Collaborator, NINJAL [-2014.03]

Abstract

This study highlights usage differences between *un* and *bai*, two recipient response tokens available in the Japanese language. Prior research in the fields of Japanese language and Japanese language education suggests that the difference in usage between the two response tokens is merely one of politeness. However, analysis by the author of the Corpus of Spontaneous Japanese (CSJ), a collection of Japanese conversations, indicates that recipients may also distinguish the use of *un* and *bai* based on a standard other than politeness. From the viewpoint of conversation analysis, this paper illustrates that when speakers use self-initiated repair during an explanation to supplement special information for recipients, the latter will switch to a different response token at the end of the repair sequence, thus differentiating between the tokens on the basis of context.

Key words: recipient response tokens, *un/bai*, interaction, self-initiated repair